
悩む鉄巨人（仮）

たくや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悩む鉄巨人（仮）

【Nコード】

N1526Q

【作者名】

たぐや

【あらすじ】

高校生・相田俊家はつまらない世の中に絶望していた。そんな中、目が覚めると、自分が知らない場所にいることに気づく。途方に暮れる中、道で大きな人型ロボットを見つける。

ふぁっといずでいす1（前書き）

アクセスありがとうございます。

大まかな設定しか考えずに書き始めているので、どうなるかわかりませんが、お付き合いいただければ幸いです。

ふぁっといずでいす1

相田俊家は生きていることが辛かった。

だからといって積極的に死にたい、というわけではない。

死ぬ時には痛い思いをするかもしれないし、自分という存在が消えるのは単純に恐ろしい。

生きているのは辛い、死ぬほどではない、と思う。

相田は漫画が好きだ。ゲームも好きだし、ラノベも好きだ。

虚構の世界は良い。毎日楽しいイベントの連続だ。

中には辛い出来事もあるが、それを乗り越えれば、可愛い女の子とのロマンスもある。

それに比べてこの世はなんだ！？

あつたりまえのことしか起こらない。

可愛い子がいても、結局彼氏がいて、なのに「彼氏とかいません」なんて嘘ついて金を巻き上げたりするのだ。

ふざける！ ふざけるな！ どっちだ！

地団駄。

ちょっと休憩してまた地団駄。

そんな世の中だから、相田は自分の人生に本気になれない。

頑張ったって、どうせ報われないのだ。

本気を出せば俺だって……。

そう思うのだが、この世にはそれだけの価値がない。

目を覚ますと同時に、相田は異変に気づいた。

森だった。

木々の間に、青い空が見えた。

落ち葉のクッションが、乾いた音をたてる。

近所の公園か？

そう思ったが、なぜ自分がそこで寝ていたのか、それがわからない。

着ているのは詰襟。

高校の制服姿で、地面に寝る。そんな趣味はなかった。心細い。

訳も無く家に帰りたいと思った。

方角もわからないまま、木々の合間を縫って、とりあえず明るい方へと向かった。

視界が開ける。

相田は呆然と立ち尽くした。

目の前に舗装されていない土剥き出しの道。その向こうはどこまでも続く緑の丘陵地。

北海道とか、イギリスのウェールズ地方とか、たぶんそんな景色だ。近所にこんな場所はない。

瞬間移動？

いや、どこかで気を失い、その間に誰かにここまで運ばれた、その方がいくらか現実的だ。

いずれまともな状況ではないが。

なんでこんな目に……。

途方に暮れた。

『こんな目』の正体もよくわからないし、これからどうしたら良いのかもわからない。

——そうだ、携帯。

GPSで現在地を確認出来れば、とりあえず家には帰れる。

制服のポケットを探るが、感触はなかった。

どこかで落とした。誰かに取られた可能性もある。制服姿なのに、学校鞆もないのだ。

とりあえず、目を覚ましたあの場所に戻るべきか。携帯も鞆も、そこに落ちている可能性は低いが、一応確認はしておくべきだろう。どうせ他に思いつくこともなかった。

森の奥に引き返しかけて、物音に気がついた。

ゾゾッ、ゾゾッという砂地を擦る音。遠くの方から聞こえてくる。

人工物の音だと思った。

森から飛び出し道に出た。

音のする方へ目を凝らす。

土埃を上げて、なにかがこちらに向かってくる。

それがなんであるか、相田は明言することができなかった。

多分、人の形をしている。二本足で歩いているからそう思った。

しかし人にしては不細工なフォルムだ。チンパンジーとかオランウータンなんかに似た姿勢。

表面が陽を反射させる所を見ると、金属製の鎧みたいなものを着ているらしい。

そして、おそらくデカイ。

樹木と道を作る遠近法から、おおよそ高さ5、6メートルはある、と相田は目算をつけた。

人型ロボット、じゃないのか？

目に入ったものを信用するなら、そうだ。

しかし相田の常識がそれを否定する。

最近は二足歩行のロボットをメディアで見る機会も多い。だからこそ言えるが、現実の二足歩行人型ロボットは、いま目の当たりにしている、あんな物ではない。

だからあれは人型ロボットなんかじゃない。

じゃあ、なんだ？

わからなかった。

そうしている間にも、それはぐんぐん近づいて来て、いまや相田の視界のほとんどを埋めていた。

相田は唾然と見上げ、思考を停止させ、ただ立ち尽くしていた。このまま踏み潰されるかもしれない、とさえ考えられなかった。そうなる前に人型は歩みを止めた。

肩の後ろから、人が顔を出し、覗き込む。

「なにをしている！ 道を空けろ！」

女の声だった。

いまの相田には、そんなことどうでもよくて、

「これは！ これはなんですか！？」

興奮しながら訊いていた。

もう疑うべくもない。

これはまだメディアにも紹介されていない、最新の人型有人二足歩行ロボットだ！

ふぁっといずでいす2 (前書き)

引き続きアクセスありがとうございます。

ふぁっといずでいす2

ロボットには独特の臭いがあった。

どこかで嗅いだことのある臭いだと思った。懐かしい感じがする。そうかこれは田舎の木製電柱の臭いだ、と気づく。とすればコールドールだろうか？

最新なのにヘンなの。

表面になにかの粉が吹きつけられていて、つや消しの黒みたいになってる。

もしかしたらステルス機みたいなものかもしれない。

え！ なになに！ そしたらこれは戦闘用かい？

またテンションが上がる。

両腕は長くて遅しくて、石の柱みたいだ。

なるほど、これで殴られたら戦車だって吹っ飛ぶんじやなかろうか。

だけどこの脚はどうだろう？

短くてガニ股だ。機動性は良さそうに見えない。

それに顔も付いてない。

センスがない。

「聞こえないのか！ どかなければ踏み潰す！」

頭上から怒鳴られた。

相田は首をすくめる。

すごい剣幕だが、本当にそんなことできるはずはない。

ハッターもハッター。無抵抗の高校生を殺すなんて、社会的に許される行為ではない。

自信をつけて、相田は相手を見上げる。

若い女性だった。目鼻立ちのはっきりした美人さんだ。

余計に気が大きくなって、

「これがなにか教えてくれないんですか！？」

怒鳴り返した。

女性は困惑した表情で、

「なにつて……？ 見てわからないか！」

逆に聞き返してきた。

「わかりますよ！ ロボットでしょ！？」

「……なんだって！？」

「ロボットですよ！ ロボット！」

女性は眉をひそめ、ロボットの後ろに顔を引っ込めた。

『ロボットとはなんだ？』

そんな声が聞こえてくる。

ロボットを知らないのか。

そんなことより、気がついたことがある。ロボットはエンジン音もない。非常に静かだ。だから声が聞こえる。

立ち止まるとエンジンも止まるのかもしれない。

しかし、歩いている時も地面を引きずる音以外は聞こえなかった気がする。驚くべき静音性だ。

『知りやせんぜ』

野太い男の声。

他にも誰かいるらしい。

て言うか、その時もロボットを知らないのか。

女性が一旦顔を出し、

「訳のわからないことを言うな！ 今すぐそこをどけ！ 本当に踏み潰す！」

言ってまた引っ込んでしまった。

「やれるもんなら……！」

相田が言い返す途中で、ロボットが本当に前進を始めた。

上がった右足が、突っ込んできて

「うがっ！」

相田は蹴られた。

速度はゆっくりだった。寸前で止まるだろうと思ったから相田は

避けなかった。

だから蹴られた衝撃自体は大したことはない。蹴られたと言うより、押された、もしくははすくい上げられた感じ。

相田は土の上をゴロゴロと転がった。

痛みよりも、怒りが勝った。

「う、訴えますよ！」

上体をだけ起こして怒鳴ったが、ロボットが前進を止める様子はない。

マジで踏み潰される！

焦ってロボットの進路から逃げ出す。

森の方へと、両手両足をみっともなく、バタバタとかいて。

ふぁっといずでいす3

相田は道の脇から通過するロボットを見た。

真横から見ると、ロボットの側面はスッカスカだった。

タイの……なんと叫んだか。三輪のタクシー。確かトウクトウクとかいう乗り物。

ロボットはあれに手足をつけたような形状をしていた。

なんだか突然手作り感丸出しになった。多分どっか小さな工場でこさえた代物なのだ。

先程の女性が、運転席と思われる場所からちらりと一瞥をくれていく。

怒りを含んだ強い視線。

『見てんじゃねえよ』

と言ってる気がした。

粗末な物に乗ってるところを見られて、きっと恥ずかしいのだろう。

気持ちがよく分かる。

ロボットは荷台を牽引していた。

四輪の幌付き荷車である。

馬車のあれだ。ドラクエとかに出てくる奴。つまり木製。

オイオイ。

軽く嘲笑しつつ見送っ……。

「……あ！」

大変なことに気づいた。

そんな場合ではない。

自分は今、迷子になっていたのだと思ひ出す。

ここがどこか訊かなければならない。そして出来ればどこかまで乗せていてもらいたい。

慌ててロボットに追いつき、

「すみません！ すみません、ちょっと！ ちょっと待ってください！」

走りながら女性の背中に声を掛けるが、

「……」

無視された。

同乗している、見るからにガテン系な髭面のオッサンが、代わりに振り返ってこちらを見た。

彼がロボットも知らない無学なオッサンであろう。

無学でもいいから、

「お話を！ お話を聞いて下さい！」

相田は懇願する。

オッサンは女性に何事かお伺いを立て……、すぐに『あっちへ行け』と手で合図してくる。

「そこを何とか！」

両手を合わせてもダメだった。

オッサンすらもこちらに背を向け、壁を構築してしまった。

ヒドイ。こんなに頼んでいるのに。

走って追うのも辛くなってきた。

最早手段を選んでいる余裕も無くなって、相田は荷台の方に目標をロックする。

ちやうど、誰にも見られていない。

荷台後方の開口部から乗り込むのは可能だ。

叱られるかもしれない。

それも事情を話せばなんとかなるだろうと思った。

二人がこちらを見ていないことを確認して、荷台に身体を引き上げる。

走っていた時の名残みたいに、両脚をバタバタさせながら転がり込んだ。

荒く息を付く。とりあえず人心地がついた。

震動がすごかった。未舗装の道を木だか鉄だかの車輪で走っているのだ。さもありなん。

時折大きく跳ねるところをみると、一応サスペンションのような物は装備されているらしい。それが逆に厄介だった。すぐに車酔いしそうである。

荷台には木箱がいくつか並んでいた。中から鉄パイプの跳ねるような音が聞こえてくる。

それがまたやかましい。

居住性は最悪だ。

しかし文句は言うまい。

言ったって誰も聞いてないことだし。

止まってくれるまでの辛抱だ。

木箱の隙間に、布切れの山を見つけた。

そこなら多少は過ごしやすいのではないか、と思えた。

這ってそちらに近づき……。

相田はギョツとした。

布切れの山の頂に、人の頭が乗っていた。

長い艶やかな黒髪の、青白い肌の女性の頭だった。相田よりも三つ四つ年上くらいだろうか。

死体……じゃないよな。

恐る恐る這い寄る。

大きく口をあけ、苦しげに喘いでいた。

固く閉じられたまぶたの上に長いまつ毛が咲いていた。細い眉が悩ましげに顰められ、額にはふつふつと汗が浮き、そこに前髪が張り付く様子が、何となく淫靡だった。

相田は胸を高鳴らせた。

グラビア写真の中の人みたいなの、絵の中から立ち上がってきたみたいなの、どこか現実感のない美しさ。

病気なのだろうか。

初めて会った、しかも言葉すら交わしていない相手なのに、相田

は家族に対するように、むしろそれ以上に、彼女のことが心配になった。

何とかできないか。

せめてものことを、と制服の袖口を伸ばして、汗ばむ額にそつとあてた。

「……！」

女性のまぶたが開く。

潤んだ漆黒の瞳。

相田の方へ虚ろな視線を彷徨わせる。

その視線を捉えようと、相田は顔を寄せた。

布山が動いて、そこから白い手が出てくる。

細くて白い指が、相田の方に伸びてきて、頬に触れる。冷たく湿った感触。

その手を握ろうとして……、

相田は果たせなかった。

女性の手は、相田の頬に触れただけでは止まらず、そのまま強引に押し退けようと動く。

相田の首が横に折れて、ポキリ。

「げ」

と喉を鳴らしながら、相田は横倒しになる。

なんで？

悲しく見上げる先で、女性は布の山ごと荷台の後方へと、覚束無い足取りで移動していく。

荷台のへりに両手を突き、外に顔を出して……

「オゲロォ！」

こっちに向けた尻を痙攣させながら、綺麗な女性は激しく吐いた。なんのこたあない。車酔いだ。

百年の恋も醒めそうな醜態。数秒の恋なら尚更。相田はがっかりしていた。

漂ってきた臭いが、相田の胸を直撃。

見事に貰った。

相田も女性の横に駆け寄り、仲良く並んで外に吐いた。

ふぁっといずでいす4

荷台のへりに気怠げにしな垂れ掛かりながら、彼女はこちらに軽く笑みを向けた。

「大変な目にあった」

アルトのハスキーボイス。アニメの少年キャラにでも声をあてれば似合いそうだ。

吐いて多少楽になったのか、眼の焦点も定まっているように見受けられる。

微笑みかけられて、相田はさすがにドギマギした。

まつ毛で縁どられた大きな目は、白と黒のコントラストも鮮やかに、しっとりしている。鼻筋もすっきり通って蹟きがない。

具合の悪そうな青白い肌色と、紫の唇という残念さ、あとデボ女というマイナス評価を十分に打ち消せるほど、彼女は圧倒的に美しかった。

だけど……。

彼女の服装に意識がいった。

衣料品のワゴンセールみたいだ。

統一感のない色彩の布たちが、身体に雑に巻きつけられている。

無国籍というか、民族的というか。得体の知れないファッションだ。

「乗り物酔いの時は、あまり厚着をしない方がいいですよ」

親切心からそう忠告。

「ふむん。そうなのか」

彼女は頷いて、思い切りよく、身体に巻きついた布を剥がし始める。

見えていいのだろうか。

一応女性が上着(?)を脱いでいるのだ。ジロジロ見るのはさすがに失礼だろう。

相田は少し視線を外した。

傍らに布がごちゃごちゃと積まれてゆく。最終的には、彼女が纏っていた時と大して印象の変わらない小山ができた。

まさか……全部、脱いじゃったんじゃないか!?

驚き半分、期待半分。漫画的なウヒヒ・シュチュエーションに鼻息も荒く見てみれば――

そんなことが現実にかかるはずもなく、山の核であった女性は、白いブラウスに、ゆったりした黒いズボンと革ブーツという、なんでもない姿で座っていた。

落胆と、当たり前だバカ、という自責。

ついでに、彼女の薄い起伏ゼロの胸元を見て、天は二物を与えないな、などとホッとしたりする。

「なるほど、確かに楽になった気がする」

艶めく黒髪を後ろに撫で付けながら、

「それで？」

女性は目をトロリと半目にさせてこちらを見た。

「はい？」

その色っぽさに魅了されつつ、相田は首を傾げる。

「キミはなんだ？」

「あ」

自分は勝手に乗り込んでいるのだったと思い出し、相田は汗をかき始める。

「あの、俺は……」

逡巡。

迷子です――というのは、いかにも格好が悪い。

他にうまい言い方はないか。

道に迷った者です。

自分探しをしています。

旅人です。

言い淀んでいると、

「いい身成をしている。どこかの從騎士殿か？」

彼女は四つん這いの姿勢で、相田の制服のボタンを指で軽く擦る。わずかに香る甘酸っぱい芳香。伏せたまつ毛や、桃を思わせる柔らかな質感の頬に、相田はクラクラとめまいを起こす。

……じゅうきし？　じゅうきしってなんだろう？

「知らない意匠だな」

上目遣いの探るような瞳。

顎の下。シャツと胸の間にポツカリと空隙ができて、相田は彼女がノーブラであることをちらりと確認した。

全くないからそれでいいのかも知れないが、うぶな高校生には刺激が強い。

「さ、桜岬高校の制服です」

座ったままでプルプルと気を付けしながら、相田は答えた。

「サグラミサキコウコー？」

「し、知りませんか？」

「聞いたことがない」

女性は何故か悔しそうに舌打ちして唸る。

相田の通う桜岬高校は、県内でもそれなりの知名度を持った進学校だ。それを知らないとなると、自分は相当遠くにいるということになる。

「花の桜に、海の岬で、桜岬。そのままです。知りませんか？」
焦る。

「桜岬か。知らないな。で、コウコーというのはなんだ？」

「は！？」

なんだ？　すげーバカなのか？

「高等学校ですよ！」

こんな言い直し、いちいち必要か？　この女は巫山戯てるのか？

「高等！？」

女性は目を丸くして驚きの声を上げた。

「学校というのは、あの学校か？　教養を授ける」

「そ、そうです」

「そのの、高等なものか？」

「た、たぶん……」

ちよつとニュアンスが違ってる気がする。

「学校に高等も下等もない。高等に位置づけられるのは、解釈としては少々乱暴だが、図書館だ」

「なんでですか。図書館は、本貸してくれるところでしょ」
話が、噛み合わない。

この人、絶対へんだ。

「キミは……少しへんだな」

「こっちのセリフですよ！」

「ふうん」

女性は壁に背中を預けて考え込む。
数秒の沈黙の後。

「……そうか」

女性は真剣な眼差しで

「キミはこの国の人間ではないな」
そう結論づけた。

ふぁっといずでいす5

「この国の人間じゃない？」

そんなわけあるか、と思った。

言葉は通じているし、外見も男女の差、美醜の差はあれど、人種まで違うとは思えない。

「俺は日本人です」

「ここはニホンじゃない」

「は？」

「そして、ニホンという地名は、この世界には存在しない」

「存在しない」

「僕の頭の中には、全世界の地名が入っている。少なくとも、人の行ける範囲はね」

「そんな」

「キミは他の世界から来たのさ。または他の時代だな」

「嘘です」

「嘘はついていない。僕の考えが間違ってる可能性は否定しないけどね」

にわかには信じがたい。

「異世界に飛ばされ、全く異なる文化に触れる。そんな物語を聞いたことはないか？」

「あります」

そうだろう——と彼女は頷く。

「おめでとう。キミはその物語の主人公だ」

異世界。ここは異世界なのか。

それは……それが本当なら……。

最高じゃないか！

あんなクソつまらない世界より、こんな美人がいて、さっき見たロボットみたいなのもある、こっちの世界の方が楽しそうだ。

それに、自分は飛ばされてきた人間。それだけで、この世界において特別な地位を与えられていると言っても過言ではない。

もちろんまだ、自分に何が出来たのか、この世界でどんな役割を果たすことになるか、それはわからない。

しかし、自分はこの世界に何らかの楔を打ち込む事になるだろう、と相田は確信していた。

ざまあみろ。

何に対してかわからないが、相田は心中にそう罵り、ほくそ笑んだ。

きっと向こうの世界と違って初心で純粋な美少女なんかもいるに違いない。

彼女は俺の過分に自己犠牲的な深い優しさに感じ入り、メロメロに恋しちゃう事だろう。

くふふ。

「主人公殿の名を聞いていなかったな」

訊かれて慌てて笑みを収める。

「相田です。相田俊家」

「アイガ・トシエ」

「相田です」

「アイガ」

「あいだ」

「うん」

分かっているのか？

「僕はニネル」

「ニネルさん」

「よろしく」

「どうも」

「どうしたい？」

「何をですか？」

「これからのキミのことさ。元の世界に帰りたいのだろうか？」

「……はあ」

「歯切れが悪いな」

「帰れるんですか？」

「さあ。僕は知らない」

「じゃあ、一応、元の世界に戻る方法を探す、という方向で」

「ずいぶん他人事だなあ」

「まだ、そんなに帰りたいてって気持ち湧かないんです。異世界に
来てるって実感もあんまりないし」

「ふうん。案外、当事者というのはそんなものなのかな」

ニネルと名乗った女性はしばし荷台の外に遠い視線を向ける。

「ふふ」

理由のわからぬ含み笑い。

「いいよ。きみはこのまま僕らと一緒に来い。行く当ても何も無い
のだろう？」

「いいんですか？」

「大丈夫さ」

「俺、金も持ってないですけど」

「だろうね。別に騙そうなんて気はないよ」

ニネルは艶然と両手を組み合わせる。

「かわりにキミの世界の話を聞かせてくれ」

ふぁっといずでいす6

「聞かせてくれ、って言われても……」

自分の世界の何を言ったらいいのか。

「逆に教えてくれませんか？ 色々と」

「もちろんそのつもりだ。同時にやるんじゃないか」

「はぁ」

「キミの世界の話を聞いて、こちらの世界との相違点を教える。非常に分り易い。それにだ——」

軽く咳払い。

「僕はキミがキミの世界に帰る手助けをしたい。そのためにはまず、帰すべき世界がどこにあるのか知らなければな」

「ありがとうございます。けど逆、じゃないですか？ まず帰る方法を探すべきじゃ」

「目的地も決めずにキミは歩き始めるのか？ それはあまりに無謀だ。逆方向の馬車にでも乗ってしまったら余計に遠くなるだろう」

確かにそうだ。

「別世界に送る方法が見つかったとしても、別の世界がキミの世界一つとは限らない。手に入れた方法が、キミのモノではない世界にしか有効でない可能性もある。これは無駄骨も甚だしい」

「全くです。全くその通りです」

激しく首肯。

「さ、キミの世界の話を」

「わかりました！ えっと……」

相田は両手の人差し指と親指で丸を作る。

「地球って惑星があって、その中の日本で島国に俺は住んでました」
我ながら下手な入り方だ、と思う。しかし他にどうしろと言うのか。

「惑星と言うのは？」

「星です」

「空の？」

「はい」

「……ん？」

よくわかんない——とニネルは眉を捻る。

「キミは……星に住んでいるのか？」

「その言い方は……ロマンチックですけど」

どうも天文学的な点で遅れている世界らしい。

「住んでいるところが、数多ある星のうちの一つに過ぎなかった、
っていうか」

「ほう！」

ニネルは感心したように目を丸くする。

「じゃあ、キミの世界では空の星一つ一つにも同じように人が住んで
いるのか」

「いえ。もしかしたら他にもそんな星があるかも知れませんが、
今はまだ確認されていません」

「そうか。よく自分たちが住んでいる場所が星だと気づけたもんだ
な」

「そういうのを研究した人が大昔いたんです。俺らの世界ではもう
常識になってます」

「惑星は星だ、と言ったな。ならばなぜ二つの呼び方がある？ 二
つの差異はなんだ？」

「え……っと」

なんだろう？

なんとなくは分かるのだが、正確さには欠ける。こういう時にネ
ットがない環境は辛い。

「恒星の周りを回っている星のことを惑星って言っくんじゃなかった
かな？ あ、恒星って言うのは、太陽みたいな星のことです」

「太陽も、星か……」

「星が小さいのは、それだけ遠いのだと思ってください。太陽は近

いから大きく見えるんです」

「なるほど。納得が行く。――で地球は丸いのだな。それはこの世界と同じだ」

ニネルは相田の手元を見つつ確認する。

「はい。球体です」

あえて言い換えた。

ニネルはこの世界が円盤状になっている、と思っているかも知れないと思ったからだ。それが天文学の遅れているこの世界の常識。

おそらくガリレオ以前の世界観を持っている――。相田はそう予測した。

ついでに、建物や電線のない風景。整備されていない道。交通手段として『馬車』が出てきたところから、全体的な文明もその頃だろう、と当たりをつけた。

実際には地球球体説はガリレオよりもっと遡った時代に唱えられている説だから、相田の予想はその時点で間違っている。

また、説があったとしても、それがどこまで世間に浸透しているか、という問題もあり、文明レベルを測るにはあまりに適当だ。

が、相田自身の捉え方が『1500年位のイタリア』といった具体的なものではなく、『昔の西洋』程度の曖昧なもので、意外とズレてはいない。

「球体！？……の中か？」

案の定、ニネルが食いつき、相田はほくそ笑む。

「球体の下部に大地が溜まって人間はその上で生活している……ブー！ 不正解です！」

古代人をせせら笑うように、相田は言った。

「人が住んでいるのは球体の表面です。上にも人が住んでるし、その裏っ側にも人が住んでいるんです。だからって裏っ側の人は落ちちゃったりしませんよ」

「なぜだ！？」

「それは地球に重力があるからです。重力があるから人は落っこち

ないんです」

「ほほう！ その重力というのはなんだ？」

「重力っていうのは……」

——なんだ？

テンション急ブレーキ。

「万有引力、みたいなの……」

「万有引力……？」

「りんごが落ちて、ニュートンが発見した……」

「ニュートン？」

相田は愕然とする。

『ニュートンが万有引力を発見』って、どういう意味だ！？
今更そんな壁にぶち当たる。

ふぁっといずでいす7

「と、とにかく。重力ってのがあって、それで地球の中心に向かってすべてのものが引っ張られているんです」

高校生の知識では説明が難しい。

「わからん」

ニネルは頭を抱える。

「どういう原理だ。いや……うん。そうだな。わかった。全然わからんが……わかった」

ものすごく苦しそうに声を絞り出す。

「確かにそうだ。そもそも上から下になぜ落ちるのか。あまりに当たり前だから疑問に感じることもなかった。モノが落ちる理由を、僕は説明できない。そういうモノだ、としか。それと同じだ」

「重力がなくなれば、上下の概念は消えます」

「そういう事か。うん。わかった。わかったと言っておこう。少なくともキミの世界ではそうなんだな。僕らの世界も同様かわからないが」

「この世界は球じゃない、と?」

「判断材料が少ない。球かも知れないし、そうでないかも知れない。今日までは平面に立っているのだと思っていた。球体の上は、ここと感じ方が違うか?」

「いいえ」

「じゃあどうでもいい。話がずれたな」

「そうですね」

「国は、ニホンといったか?」

「はい。世界から見れば小さな島国です。だけど比較的豊かで、平和です」

「キミは貴族か何かか?」

「まさか。普通です。両親共働きの、どこにでもいる高校生ですよ」

「普通か。その年でまだ学校に行っているのか？ 一日どれくらい学校にいる？」

「朝八時位から夕方の十六時とかそれくらいまでですかね。それが週五日」

「仕事は？」

「バイト……時給で働く、お小遣い程度の金が貰えるような仕事ですけど、そんなのだったらやってる人間もいます。けど俺は働いてないです。就職は、たぶん大学に四年行って、その後ですね」

「大学……」

ニネルはため息混じりに呟いて、

「キミはいくつだ？」

「十七です」

「十七歳といえば、この国では働いていて当然の年齢だ。なのにこの上まだ大学とやらへ行くか。それは普通の事か？」

「まあまあ普通です。特別なことではありませんよ」

「なるほど平和だ。おまけに相当豊かだ。無駄なことにそんなにも時間を割けるのだからな」

「無駄だなんて！」

普段は『勉強なんて社会に出たら役に立たない』なんて言ってるのに、他人に指摘されると意外に腹が立つ。

「怒らせたのなら謝る。批判しているんじゃない。感心してるんだよ。知識というのは重要だ。あるのとないのとでは世の中の見え方がまるで違ってくるからな。それをよく理解している国のようだな。文化水準の高さも窺える」

「先進国ですから」

「強いのかい？」

「戦争ですか？」

「他に何がある」

「自衛隊はあるけど、一応軍隊じゃないってことになってるから、強いかどうか俺には……」

「わからないか？」

「はい」

「自国の強さに興味はないのか？ 強さを誇りたいとも思わないか？」

「別に……」

「本当に平和なんだな。それともキミに愛国心がないだけか……。自国がの強さもわからずに、安心して暮らせるものか？ 他国に攻められたらどうする？」

「それは俺の考えることでは……」

「自衛隊とやらが護ってくれるのかい？」

「わかりません。自衛隊は専守防衛って言って、相手に攻撃されて初めて防衛のために軍事力を行使するって決まりなんで、それはきつと不利なんでしょうけど」

「なんだそれは？ ふざけてるのか？」

「ふざけてません！ これはすごいことなんです。世界的に見ても日本にしかない戦略です。日本は戦争しないんです！」

「相手がいる以上、戦争は起こるよ。ニホンがしないって言ったって、相手にそのつもりがあればね」

「アメリカっていう強い国がバックに付いてるから大丈夫です。もしもの時は護ってくれるし、アメリカがあるうちはたぶん他の国も日本には手が出せませんって」

「ああ。ニホンというのはそのアメリカという国の属国か」

「属国って……」

外の人にはそう見えるのかも知れない。

ふぁっといずでいす8

日本という国は、バカげているのだろうか。

政治の話やら、禪一丁でデブ同士が押し合うスポーツの話やら、このまましてもなんだか恥部を晒すようではばかられる。それはきつとそういった事柄を肯定するための知識や見識が、相田の中で決定的に欠けているからなのだろう、と思う。

もともとどうしようも無い、と感じていた世界だ。擁護するような価値などありはしない。

「戦争って言えば、なんですけど……」

「なんだい？」

「外の――」

相田は前方を指さす。

「この荷台を引っ張てるアレは、戦いの為のものですか？」
ようやく訊けた。

「ゲートクラヴィオかい？」

「ゲートクラヴィオって言うんですか？」

「そう。キミの世界にああいうのはない？」

「ない事もない、なんですけど……。アレはどういったモノなんですか？」

「うん。アレの説明は僕よりもふさわしいヒトがいるのだけど……
簡単でいいかい？」

「構いません」

「ゲートクラヴィオは魔法で動く鉄や木製の巨人だ」

「魔法!？」

「ん？」

「魔法が……あるんですか？」

「魔法は、あるよ」

「それは、例えば火球で敵を攻撃したり、眠らせたり、防御力を増

強したり、HPを回復したりする、アレですか？」

「最後のはよく分からないが、確かにそういうのもあるね」

「俺の世界には、魔法は実在しません。テレビゲームとか空想の中だけのことです」

ここは要するにアレか。ファンタジーRPGの世界か？

「お、俺も魔法使いたいです！」

「って言って簡単に使えるもんじゃないから。誰でも彼でも、ってわけには行かない」

「修行したら使えますか？」

「うん。あとは資質があればね」

「いいなあ。魔法、使いたいなあ。どんなかなあ。見てみたいなあ」

「そんなにかい？」

「そりゃそうです！」

「僕が魔法使いだ、って言ったら？」

「疑います」

「ん、なんで！？」

「そういう格好じゃないですから。ニネルさん普段着でしょ？」

「どんな格好なら魔法使いらしいんだい？」

「例えば、真っ黒なフード付きのローブを着て、トンガリ帽子被ってたり。あとはなんか、ピエロみたいなに派手な格好してたり。

あと杖持ってたります」

「イメージバラバラじゃないか」

「そうですね」

「僕みたいな魔法使いがいたっていいじゃないか」

「まあ……。え？ 本当に魔法使いなんですか？」

ニネルは白慢気に顎を上げる。

「そうさ。驚いたかい？」

「本当なら」

「じゃあ驚き給え」

「なんか、なんかやってみてくださいよ！」

「突然言われて出来るようなものではない」

「嘘なんでしょ？」

「違う」

「証明してください」

相田が詰め寄ると、ニネルはそっぽ向いて舌打ちする。

「一度だけだぞ」

言ってニネルは相田の耳元に左手を伸ばす。

冷たい指先が首筋を撫ぜ、相田はゾクリと身を震わす。

リンツと金属の震える高く小さな音。

引いたニネルの指はいつの間にか金のコインをつまんでいた。

「……」

「……」

「……手品、じゃん」

「え!?!? びっくりしない!?!?」

「手品じゃん」

「キミの耳のあたりから金貨が出てきたんだぜ!?!?」

「だって、手品だもの」

「手品ってなんだよ!」

「あんたが今やったやつですよ!」

「僕は魔法を……」

ニネルは涙目でオロオロする。

「がっかりだ!」

ふぁっといずでいす9

「いきなりふられてできることなんてこんなもんしかないよ」

情けなく眉をハの字にして、二ネルは言った。

「そんななら俺だってできますって」

相田は指を耳の穴に突っ込んで反対側の口腔内壁をかく真似をして見せる。

「ほら」

「子供騙しだ」

「同じでしょ？」

「違うって。いいか魔法ってのは、キミの世界ではどうか知らないが……いや、キミの世界にはそもそも魔法がないって言ったじゃないか。ないくせに文句言うな」

「手品はあります。マジックって言い換えりゃ魔術と同じです」

「ともかく、魔法ってのはおいそれと簡単に使えるもんじゃないんだ。準備も必要だし、大掛かりになるようなら事前に許可申請も必要だ」

「許可って、どこに？」

「魔術協会」

「奇術協会みたいなのところですか」

「色々やややこしいんだ。魔法使いの事については一般人にあまり詳しく話すことはできない。キミの言う手品も魔法の一部だと思っ
てくれ」

「タネあかしはできないってことですか」

「うん。多分そういう事だ」

結局、二ネルが魔法使いなのかも、実際この世界に魔法が存在するのかも、はっきりしない。

本当ならもっと突っ込んでコテンパンにしていてやるところだが、相手が美人と言うこともあって、今はこれくらいで勘弁してやろう

と相田は思った。

「じゃもう魔法の話はいいです」

「意外にあっさりと引き下がるね」

「なんて言いましたっけ……あの前歩いてるやつ」

「ゲートクラヴィオ」

「そうそれ。ゲートクラヴィオ」

確か『魔法で動く』と言った筈だ。今や眉唾だが。

「あれ動かしてる人も、魔法使いつてことですか？」

「いや。彼女は奏縦士だ」

「奏縦士？」

「ゲートクラヴィオを操るのが仕事さ。彼女は同時に調律師でもある。そっちが本業だったかな？」

「調律？」

「早い話が、アレを製造販売している工房のお嬢様だね」

「魔法使いじゃなくても動かせるんですね!？」

「元氣になったな。魔法使いがダメなら今度は奏縦士かい？」

「俺にもできそうですか？」

「どうかな。簡単な作業なら、無理なことはないと思うけどね。本格的なのは、難しいと思うよ。彼女も幼い頃から血の滲むような努力をして、ようやくアレを手足のように操れるなったわけだから」

「やってみなけりゃ分かりませんよ」

意外な才能を発揮するかも知れない。元の世界では何一つ取り柄のなかった自分。別の世界にこそ、居場所があるのではないかという希望がふつふつと湧いてくる。

「見してもらえるかな……」

「いま見てもあんまり楽しくないと思うよ。歩かしてるだけだからね」

「そうですかあ」

「数年前に僕は見たんだがね、十体以上のゲートクラヴィオたちが一斉に奏でる武曲は実に勇壮だよ。それぞれが異なった旋律で奏縦

されているのに、まるで一つの協奏曲のように絡み合い響き合うのさ」

どうゆう事だ？

相田は首を捻る。

ゲートクラヴィオというのは、なにか特別な楽器を演奏するためのモノなのか？ それともあれ自体が実は楽器だとか？

荷台が一層大きく揺れて、動きが止まった。

「止まったね？」

「止まりましたね」

「着いたのかな？」

「どこにです？」

「目的地さ」

ふぁっといずでいす10

「目的地……」

この人達はどこかへ行く途中だったのか。
今頃になってそんな当たり前のことに思い至る。

「北の辺境でね、ちょっとした厄介事があったさ」

「厄介事ですか」

「大きくて凶暴な蜥蜴が悪さをしてるらしい」
大きくて凶暴な蜥蜴って……

「ドラゴンですか!？」

ファンタジーっぽい。

「ドラゴンって言うのは初めて聞くけど。こちらでは竜とか呼ばれているな」

「そうです、それです! ニネルさんがさっき言ったみたいに大きな蜥蜴って感じの外見で、翼が生えてて、体中は鱗に覆われて、火とか吐いちゃうモンスターです」

「キミの世界にもいたか」

「あ、いえ。これも魔法とおんなじで空想の中だけの存在なんですけど……」

……と言うことは魔法とおんなじでドラゴンの存在も嘘じゃなからうな？

相田はそんな目でニネルを見る。

「本当だよ。そんな嘘ついてどうするのさ」

察し良くそう答えてニネルは笑う。

「退治しに行くんですか？」

「うん。たぶんね」

「ニネルさんたちは、化け物退治が仕事なんですか？」
その手助けをするのが、この世界での自分の役割か？
相田はそう想像する。

運動神経は特別良いわけではないし、武道の心得もまったくない。そんな自分が救国の勇者となる。

方法？ それは分からない。きっと他の世界から来た自分にしか扱うことのできない武器とかがあったりするんだ。たくさんのクエストを経験し着々と成長してゆき、凶悪な魔王を倒すのだ。

「まさか」

ニネルの声が相田を現実に戻す。

「もちろん退治してみせれば、それなりの報酬はあると思うけどね。こんなこと……キミの言うドラゴンみたいなのが暴れるなんてことは稀だから、それだけでは食べていけない」

「そうなんですか？　じゃなんで……」

「ゲートクラヴィオを売り込みに行くのさ。これから行く場所はこの国の最北に位置していてね。他国の侵入に備える要所なんだ。戦力増強に繋がるモノだと判断されれば……」

「売れる？」

「最悪売れなくとも、現在彼らが所有するゲートクラヴィオの改修くらいは任されるかも知れない」

すると、やっぱりゲートクラヴィオっていうのは戦いに関係する道具なんだ。曲だとか奏でるだとか、その辺りとの関連が今ひとつ分からないが。戦意高揚か？

それにしても、彼女らの目的が営業とは……。

ファンタジーなのに夢のない、下世話なことを知ってしまった。

相田はわずかに意気消沈する。

「で、降りないんですか？」

「ん？」

「目的地に着いたんなら降りましょうよ」

「まあ待ちなよ。止まったからって着いたとは限らない」

「自分が『着いたのかな？』って言ったんじゃないですか」

「言ったよ。着いた、と明言したわけじゃない」

「そうですけど」

「さっきも突然止まったんだよ。そしたらしばらくしてまた動き出した。んで変な少年が転がり込んできた。そんなこともあるからね」

「やあ、それは俺のことですね」

「だから呼ばれるまで待とう。降りるのも、降りたあともう一回乗るのも面倒だ。疲れる」

「体力ないなあ」

「ないよ。魔法使いだからね」

「どうも胡散臭い人だ。」

ふぁっといずでいす11

「一応確認しときますけど、ニネルさんも俺と同じような境遇ってことはないですよね？」

「異世界からきたってこと？」

「違いますよ……そうなんですか？」

「紛う事なきこの世界の人間だよ」

「でしょうね。そうじゃなくて、俺と同じで前の人達には内緒でこの荷台に乗り込んでるとかないですよね？」

「大丈夫だよ」

大丈夫——って、なんか妙にボンヤリした回答。

「じゃ、なんでこんな布っ切れの山に埋まってたんですか？ 実は隠れてたんじゃないですか？」

ニネルが最初身体に巻きつけていた衣類の山を指でつまんでめくる。

改めて見ると本当に雑多で、統一感のないラインナップだ。ストーricalな物から袖付きのセーター、はてはズボンまで……。

「埋まってたんじゃないよ。着てたんだ」

「表現が間違ってると思いますけど」

「さっきも言ったけど、目的地が北なんだ。北は寒いからね。いっぱい着てきた」

「それならそれで、もっとちゃんとしたの着たほうがいいと思います」

「持っていないんだ」

「貧乏なんですか？」

「急いでたから、有り物で済ませたんだよ」

バカなのか頭のネジが抜けてるのか。魔法使いなのに知能が低くて大丈夫なのだろうか。

「そんな寒いところ行くんなら、俺にも半分貸してくださいよ」

「えー。寒いのだよ」

「俺だっていやですよ」

「わがまま言うな。異世界から飛ばされてきたくせに」

「好きで飛ばされたわけじゃないです」

「帰る方法と一緒に探してもらえただけでも有り難く思えよ。着る物までねだるな」

「食事は？」

「それも自分で何とかしろ」

「そんな！ 金もないんですよ!？」

「稼ぐ方法を考えるんだな」

「考えるったって……」

働かなきゃいけないってことか？

RPGみたいにモンスターを倒して金を稼ぐ事もできないのなら、そうするしかない。手に職もないのに、一体何をして金を得たらいのか。コンビニでバイト、というわけにもいかないだろう。

元の世界に戻る方法よりも、まずこの世界で生活していく方法を探さなければならないとは……。

相田はその現実に関心を抱えた。

「――先生」

その声は荷台の外から聞こえてきた。

男の野太い声だ。

「先ス――うおっ」

荷台を覗き込んできた髭面男が、予想以上に近くにいたニネルに、身を仰け反らせた。

「そんなところにいらっしたんですか。驚かせてください」

髭面男は少し不機嫌そうに口元を歪め、ニネルから視線を逸らす。前の――ゲートクラヴィオに乗っていたオッサンだ、と相田は思った。

口髭、あご髭、もみ上げが全部繋がっており、見るからに男性ホ

ルモン爆発である。よれたクリーム色の長袖にオリーブ色のオーバーオール、逞しく盛り上がった肩や腕の筋肉が、ガテン系らしさを醸し出している。

「いたよ。驚かすつもりはなかったけどね」

「お元気そうですね。ずいぶん顔色もよろしい」

言われてみれば確かに。紫だった唇も、今は綺麗な桃色だ。

「お陰さまでね」

「お嬢が魔法使い殿に少し休憩を、って仰ってたんですが――不要でしたか」

「珍しい。優しいじゃないか」

「お嬢はああ見えて優しい方です」

「ノルドチエリはまだ遠い？」

「まだまだ。今日はエグサントで一泊。ノルドチエリまでは順調に行ってもまだ三、四日かかる予定ですね」

「遠いんだねえ」

「ナグロがなけりゃ倍はかかってますぜ」

「優秀だねえ」

相田の知らない単語が色々出てきた。

多分、ノルドチエリというのが目的地なのだろう。エグサントは村か街の名前。ナグロはなんだか全然分からない。

「ニネルさん」

相田はニネルのシャツの袖を軽く引っ張って説明を求める。

「ナグロっていうのは――」

「お、テメー！」

突然、鬼の如き面相を現した髭面男が、荷台に身を乗り上げ相田の方に手を伸ばす。

「な、なんですか!？」

相田はビビりながら、捕まえようとするその手から逃れる。

「さっきのガキじゃねーか。なんで乗ってる!」

「今頃気づいたか!」

「なに！？」

手を足先でペシペシと蹴って退ける。

「ニネルさん助けてください！」

「ああ……」

「ああ、じゃなく！」

「こいつ！ 先生のお知り合いですか！？」

「ううん」

どっちとも取れる微妙な返答に、相田も髭面男も動きを止める。

『ほら見ろ！』

互いに言い合ってまた攻防を再開した。

ふぁっといずでいす12 (前書き)

更新がだいぶ間延びしてきちゃいました。出来れば週一ぐらいで更新したいところ。

ふぁっといずでいす12

「降りろ、コラ！」

「ヤです！」

「ヤじゃねー！ 乗っていていい理由がねえだろ！」

「ニネルさんが一緒に来いって言ったんですよ！ ね？ ニネルさん！」

「本当ですかい？ 先生！」

動きを止めニネルを注視。

「ううん」

『ほら！』

ペシペシ。

「ニネルさんちゃんと説明してくださいよ！」

「ナグロっていうのは、あのゲートクラヴィオの名前でね——」

「機体名ですね！ けどそれ今いいです！」

「何ごちゃごちゃ言ってやがんだ！」

「ナグロがなんのことか聞いてたんですよ！ 聞こえてたでしょ！？」

「先生、こいつは何なんですか！？ もしかして脅迫でもされてるんですかい！？」

「されてないよ」

「脅迫されてるんなら仰ってくださいよ！」

「脅迫されてたら言えないよ」

「そりゃそうだ！ テメーコノ野郎！ 先生を解放しろ！」

「何もしてませんよ！ ニネルさん、ややこしいこと言わないでください！」

「じゃあ何も言えないよ？」

「なんでですか！」

「テメーが脅迫してるからだろう！」

「してないですって！」

「うるさいと思って来てみれば……これはなんだ？」

その女性——相田がこの世界にきて初めて会った人——が現れたのは、相田が荷台の縁に指先を引っ掛け、母に買い与えられたペイズリー柄のトランクスを白日の下に晒し、足首をガテン系のオッサンに引っ張られ、身長を三センチほど引き伸ばされた時だった。

「お嬢！ 不審人物です！」

言いながら髭面男は相田を仰向けにひっくり返す。

相田は一瞬右手のみで身体を支え、両腕を交差させるように左手を再度荷台の縁に引っ掛け、頭部からの落下を必死に凌ぐ。

「変質者！」

女性の声が耳に突き刺さる。

交差した自分の腕で視線が遮られ、相田には自分の状態が見えないが、パンツ丸出しだから多分そう思われたのだ。

「違います！」

「テメー！ お嬢になんてもの見せんだ！」

「あんたがズボン脱がしたんでしょに！」

「バツツエ！ 早く何とかしろ！」

女性がヒステリックに指示する。

「ガッテンで！」

髭面男が応じ、相田はもう一度ひっくり返されて、元の姿に。

「何事だ？ バツツエ」

「さっきのガキです。勝手に乗ってやがりました」

ああ、このオッサンの名前は『バツツエ』か、と頭の隅に記憶しつつ、それより元通りうつむけにされただけで『なんとか』なったのだとすれば——と考えずにはいられない。

トランクス の裾から囊か茎が露出していたのかも知れない、と思いきや、相田は発光せんばかりに激しく赤面する。

「面白いだろ？ ルキノ君」

片膝を立てて状況を傍観していたニネルが言った。

ふぁっといずでいす13

「全っ然！」

ルキノと呼ばれた女性がきっぱりと答えた。
腰に手をあてた姿が地面に影として映る。

「あなたの所業ですか？」

「所業とはヒドイな。まるで僕が悪人みたいだ」

「善人ではないのでしょうか？」

「まあね。しかし驚くなかれ、この状況はなんと僕の善意から発展したのだよ」

「どういった善意ですか？」

「彼、この破廉恥な少年はね——」

破廉恥な少年、というのは

「俺のことですか!？」

「そうだよ」

「くうっ」

「テメーは少し黙ってろ！ 先生がお話をしてくださるってんだ！
それをお嬢がお聞きになって、テメーの処遇をお決めになるって
こった！ それまで神妙にしてろガキ！ いい加減そっから手を離
して正座しろ！ そして——」

「バツツェも黙りなさい」

「ガッテンで！」

「……話していいかな？」

「ええ、どうぞ」

ルキノが促す。

「彼はとある名家のご子息でね、とある事情で以て出奔したのだそ
うだ。ご覧の通り着の身着のまま逃れて来たらしくて、お金もない
し寝るところもない。世間知らずで体力もない。放っておくわけに
はいかないだろ？ だからこうして拾い上げたというわけさ」

顔に血を溜めながら相田が声を上げる。

「ニネルさん！」

「なんだい？」

「そういう設定で行くんですね！？」

「うん。理解してるなら『設定』とか言わない方がいいと思うよ」

「言いません！ もう言いません！」

「あはは」

「なんです！？ なにを笑ってるんです！？」

「キミがなんか言うたびにケツ肉がパクパクして、お尻と話してるみたいだ」

「本当ですか！？」

「あはははは」

下らない事で笑い過ぎ。

他の二人はどんな顔でそれを見ているのだろうか？

ニネルがちゃんとしてくれないと、相田はこの場で放り出されるかも知れないのだ。

地面を見ている相田には周囲の雰囲気が分からない。とりあえずルキノの影はほぼ無反応だ。

「そういうわけだからルキノ君、よろしく頼むよ」

頼む側の人間とは思えない軽さ。

「バツツェ君も。さあ彼を放してあげなさい」

「しかし……」

当然のようにバツツェは難色を示している。

「これは――」

ルキノの影は頭を掻いて、

「我々にとって不利益になるようなことではない、と言い切れますか？」

静かに問うた。

一瞬の沈黙。

「もちろんさ」

表情は見えない。しかしニネルの声は自信に満ちていて、相田はそれを意外な気持ちで聞いた。

ふぁっといずでいす14 (前書き)

二ヶ月以上のご無沙汰です。色々ありましたね。無事でなによりです。

ふぁっといずでいす14

脱がされた瞬間よりも、穿き直している時の方が小っ恥ずかしいのは一体どんなワケなのか。

そんなことを考えながら、相田は荷台の陰で、もみ合いの中脱がされてしまったズボンをいそいそと穿く。

ニネルは尊重されている。彼女自身の人柄や能力によるものなのか、それとも魔法使いという地位によるものなのか。どちらか分からないが、ニネルが責任を持つと言えば、ルキノはそれ以上詮索せず、バツツエに相田を自由にしよう指示もした。

少なくともあの三人の中では、ニネルが最も上位の存在と思える。胡散臭いところもあるが、頼っていいのだろう。

——魔法使いというのは本当なのだろうか。

バツツエのセリフには、それを肯定するような所があった。『魔法使い殿に……』云々と。

それに、あのロボット。ゲートクラヴィオ。普通に考えればこの文明レベルとは、背丈が合わない気がする。

魔法で動くと言うから、例えばゴーレムみたいな代物なのかも知れない。それならば納得が行く。

確かにニネルが相田に見せたものは、単なる手品だった。しかし考えてみれば、いきなり火球を飛ばされたって困るわけで、あれはあれでしようがないことだったのだ。

この世界には、魔法がある。

そう信じることに決めた。

その方が面白い。

相田は荷台の陰から、顔をちよつと出す。

ニネルは荷台から身を乗り出してニヤけていた。

真顔で相手をしているのが、ルキノという女の人。十代後半から二十代前半。表情は硬いが、素材は柔らかい。美人、と言う点では

ニネルと同じだが、そのベクトルが少々違う。ルキノの方が肉感的で、男子の目に対し強い吸引力を有している。

『ベルサイユのばら』みたいな、それを少し地味にしたような紺色の軍服――らしきものに身を包んでいて尚そうなのだから、脱いだらスゴイに違う。

そういった観察ができたのはほんの一瞬。盗み見るには距離が近い。

綺麗な瞳が四つ、凡人を捉えた。

気圧され、たじろぎ、相田は愛想笑いを浮かべる。

「なんだい？ ナメクジみたいな顔して。気持ち悪いぞ」
シヨックである。

愛想が、ニネルに対してはむしろ生理的嫌悪感を与えたのだという。それが本当なら、それが遍く女性からの評価であるとするならば、相田は死ぬまで童貞決定である。労せずして魔法使いになれる、ということでもあるが、もちろん全然嬉しくない。

「改めて、紹介しよう」

マイペース。ニネルは相田の感情にはお構いなしで、ルキノを指し示す。

「ルキノくん。売り出し中の若手調律師だ。奏縦士としても良い腕を持っている」

ついで相田の足元の辺りを指差す。

「彼はアイガくん」

「相田です」

「無職だ」

「高校生です」

ルキノは軽く顎を引き、

「よろしく無職のアイガくん」

相田の声は雑音として処理されている様子。
ようするに信用されていないのだ。

ふぁっといずでいす15(前書き)

今回は久しぶりにショートスパンで投稿

ふぁっといずでいす15

「あなたはさっき妙なことを言っていたな」

ルキノは悠然と腕を組み、相田を見据える。

「さっき……？」

——胸を人の目から隠したいという心理かな？

——それとも重いから支えておきたいのかな？

そんな桃色の煩惱が、会話のために費やすべき脳領域を圧迫していた。だもんで相田には『さっき』がいつのことやらさっぱり分らない。

いずれ相田の発した言葉など、ルキノからすれば全て『妙』だろう。だから余計になんだか分からないわけである。

「ナグロをなにか他の名で呼んだと記憶している」

ルキノは苛立ったように補足した。

「ああ……」

それは結構前の話だ。相田はナグロという名のあのゲートクラヴィオを、モビルスーツとかそういう類のロボットか何かと思ったのだ。

「いや、気にしないでください。勘違いでした」

「勘違いって……」

ルキノは眉を顰める。

「どこかで似たものを見たことがあるのか？」

「ああ、えっと……いやあ」

モゴモゴと口ごもる。なんとも説明が面倒だ。

ニネルに目で助けを求める。

軽薄そうな笑みを湛えて、状況の推移を傍観していたニネルは、
「彼はね、ゲートクラヴィオを実際に見るのは初めてなんだってさ」
ちよっと肩を竦めてみせた。

「はっ!？」

ルキノは片眉を跳ね上げ顔面のバランスを崩す。

「世間知らずにも程がある」

相当呆れられている。

この世界のことについては知らない事だらけ。相田としては、仕方のないじゃないか、と主張したいところなのだが、ルキノはこちらがついさつき異世界から飛ばされて来た事など知らない。不当に評価が下がってゆく気がする。

「……ん？」

相田はふと気づいてニネルの耳元に口を寄せる。

「俺が他の世界から来たことって、明かしちゃいけないんですかね？」

ニネルが『世間知らずな家出人』みたいな設定を持ち出したからなんとなくそれに従ったわけだが。

「んゝ。そんな事言ったって信じてもらえないと思うけど？ 異世

界人も世間知らずのボンボンも大して変わらないだろ？」

「そう……ですかね」

「他の世界から来ました、なんて言ったら、モノを知らないだけじゃなく頭そのものがおかしいんだ、って思われるぜ？ まあ、哀れみを持って接してくれるかも知れないけど」

「はあ……」

「世間知らずなのは分かりました」

相田とニネルの内緒話を遮るように、ルキノが声を上げた。

「しかしそれでは、ナグロを何かと間違えた事の説明にはなっていないません」

相田に聞いても埒があかないと思ったのか、問い掛けはニネルに向けられていた。

「そうりゃそうだ」

ニネルは頷く。

「アイガくん。ナグロをキミはなんて呼んだんだい？」

「えと、ロボットです」

「ふうん。ルキノくん、ロボットだつてさ」

そのまんま。ガキの使いみたいな遣り取りだ。

「そう、ああそうでした。確かに彼はさっきそう呼んでいました。初めて聞く名です。バツツェも知らなかった。ロボットとはなんですか？」

「ゲートクラヴィオだろ」

二ネルは事もなげに言った。

「は？」

「だからロボットというのはゲートクラヴィオの事だ。方言か何かだろ？」

——なるほど。

相田は密かに手をポンと打つ。

簡単な事だった。さすがに嘘が巧いというか、機転が利くというか。

「そうですそうです」

相田はなんとも首を縦に振った。

『は？』の顔のままルキノは動きを止め、数秒。

「……そうか。そうですか。納得です」

ルキノはふう、と小さくため息。落胆が窺える。

「どうしたんだい、ルキノくん。随分こだわってる様子だったけど」

「父の……」

伏し目がちに呟きかけ、ルキノはハッと顔を上げる。

軽い咳払いと共に、バツの悪さを振り払って、

「ナグロは父の作品です。似ている物があるとすれば、当然気になります」

言い切る。

「なるほどね。こっちも納得だ。互いにすっきりしたね」

二ネルだけがあっけらかんと笑った。

ゲートクラヴィオ1

ゲートクラヴィオ、ナグロのコクピットにあたる場所は意外に広かった。およそ三メートル四方。高さは相田が少し首を竦めて立てるほどである。

材質は概ね木。所々金属で補強されている。

天井は幌。後方、そして両サイドは大きく開いている。前面だけが内巻きの曲線を描く壁。

その壁の中央に鍵盤が並んでいた。

ピアノとかオルガンとか、そんな感じの。

相田はナグロの操縦席——こちらの言葉に倣うなら奏縦席が正解かも知れない——に腰を下ろした。

奏縦席の前面、車ならダッシュボードとかハンドルのある位置、そこにアップライトピアノが据え付けられているような具合だ。譜面台のあるべきところには無数の小さな穴が空いる。ここから前方を透かし見るのだろう。

「いいか若造」

バツツェが相田の首に太い腕を回し、後ろから体重をかけてくる。汗臭い。

触れる肌が少しベタベタしている。

そんな不愉快な感覚が、今の相田にはさほど気にならない。

興奮していた。

男子であれば、自らの手で機械を操縦する、という行為に憧れを持って当たり前である。

これが人型ロボットの——ちよつと違うけど——操縦席からの景色か。

「基本的なこった。ナグロに限らず、ほとんどのクラヴィは音で操る。こいつらは決められた旋律や和音に対応して、決められた動作を行う」

「なるほど。だから奏縦なんだ」

「で、一連の行動、例えば格闘戦なんかをさせた時に、ちょうど楽曲が完成するように調教する。そこが調律師の腕の見せ所ってわけさ。まあつつても、対応音はほぼ完成を見た——って言われてるな。標準律なんてのが広まってな。実に良く出来ている。単体だけじゃなく、集団でもそれなりにいい感じに聞こえるんだ。面白味はねえけどな」

「へえ……イイタタッ！」

鍵盤に伸ばした手がバツツエにひねり上げられた。

「奏縦卓に触るんじゃねえ！ 場合によっちゃ振り落とされるぞ！」
「分かった！ 分かりましたよ！」

振り払った腕をさする。馬鹿力だ。折れるかと思った。

「こいつらあ融通が利かねえんだからな。気を付けろ。いきなり飛び跳ねでもしたらテメエもポーンだ」

「ポーンて……」

「で、グシャだ」

拳を手の平に打ちつけてバツツエは凄む。

「気をつけますって」

「クラヴィの内部は——」

相田から離れ、バツツエは奏縦卓脇の壁に嵌っているキャップを回し外す。

ちょうど車の給油口くらいの大きさの丸い穴。バツツエはそこに指を突っ込んで、なにやら粘っこい液体を掬い出した。

「——こいつで満たされている」

卵の白身くらいの粘性を持った青みがかった代物だ。

「スライム？」

「トロン。魔法生物だ」

名前の通りトロンとしてる。

「奏縦卓から出ている弦の振動を感じ取って、トロンは自在に収縮する。内部でトロンが収縮することによってクラヴィは動くってえ

わけさ」

「はぁ……」

なんとなく感心した。

トロンの付いたバツツエの太い指が相田の鼻先に突出される。

「どうだ？」

「なんです？」

「舐めてみるか？」

「なんでですか」

「甘いぞ」

「うそでしょ？」

「舐めてみろ」

「本当に？」

「ああ」

躊躇。こんな得体のしれないものを摂取して、果たして大丈夫なのだろうか。

変な匂いはないが。

バツツエが厳つい顔でジッと覗き込んでくる。暑苦しい。

——ええいつ！　いったれ！

相田は思い切ってバツツエの指をパクリと口に含んだ。
じゅるり。

「うげああ！」

オヤジの悲鳴。

バツツエが指を引き抜き、そのまま平手で相田の横っ面を張った。
鈍い音。重い平手打ち。

相田は吹っ飛び、コクピット内を転がった。

「何しやがる！」

床にへばり付き、意識を朦朧とさせながら、それはこっちのセリフだ——と相田は思った。

「あ、あんたが……舐めてみろって……」

弱々しく抗議する。

「だからって他人の指を舐める奴があるか！ 気色わりい！」
た、確かに。

相田は愕然とした。

トロンを舐めるだけでも大事件なのに、汚いおっさんの脂ぎった指までしゃぶってしまった。

舌の上に残る、柔らかいような、硬いような、いやな感触。

仄かな甘みと、しょっぱさが口内に粘っている。それがトロンの味なのか、バツツエの味なのか、相田には判断がつかない。

最悪の気分だった。

ゲートクラヴィオ2

舌の上でトロロンが僅かに蠢いているのを感じた。

口腔内が引っ張られるような感覚。口に広がったトロロンが、一箇所に集まるおぞましい感触。

こいつ、生きてる!?

相田は一個に寄り集まったトロロンをべっと外へ吐き出す。

それでもまだ足りない気がして、何度も唇で舌をしごき、何度も唾を吐く。

後方でバツツェがゲラゲラと品なく笑う。

「どうだ? 甘かっただろ?」

「何なんですかこれ!?!」

「だからトロロンだよ」

「そんなこと分かってますよ!」

「いや、飲み込みまわなくて良かったな」

「は?」

「トロロンは甘いけど食っちゃいけないぜ」

「な、なんでですか!?!」

食っちゃいけない理由も、それを食わそうとした理由も。

「トロロンは肉食だからな。腹に入れたら逆に食われるかも知れん」

「そ、そんなモノを!?!」

「はっは! 冗談だ。あれくらいの量ならちよっと下痢するくらいだ。心配すんな」

「冗談って……」

量によってはやっぱり食っちゃいけないのか。

「分かりやすかっただろ?」

「なにがです!?!」

殺されかけたのかと思うと怒りが収まらず、相田は怒鳴るように聞いた。

バツツエは相田に睨まれても意に介せず、

「トロンはこんな見た目でもちゃんと生きてんだ。そんで、別れてもまた集まろうとする習性があるってことだ。不思議だろ？」

「不思議ですよ！」

バツツエの神経もだ。

ゲートクラヴィオ3

トロンという生物は、個体なのか、それとも集合体なのか。

いや、動くからって生き物とは限らない。

例えば、磁性流体のようなものかも知れない。こちらの世界の人
は『動く＝生き物』と考えているだけで。

「俺が吐き出したアレも、こいつの中に戻ろうとするんですか？」

荒く息をつき、苛立ちを押さえ込みながら、3〜4メートル下の
地面を指さして相田は問う。

「さすがにあれだけ離れば戻らんよ。しばらくしたら死ぬだけさ。
死ぬとトロンは酸っぱくなる。食えたもんじゃねえ。害はなくなる
がね。ま、腐ればやっぱり腹は壊すんだろうがな」

味とかどうでもいい。

肉食、というのもトロンが実際捕食してるわけじゃなくて、単に酸
みたいなもので溶かしているだけじゃなからうか。

この疑問をバツツエにぶつけてみても、無駄な気がする。こうい
うことはやはりニネルに訊ねるべきだろう。

しかしニネルはこの場にはいない。

ルキノが提案したという休憩時間を使って、ゲートクラヴィオを
見学したいと申し入れたわけだが、そこにニネルはついて来てくれ
なかった。高い所が苦手なのだそうだ。

ルキノもどこかへ行ってしまうて、むさいおっさんと二人っきり。
それはまったくもって歓迎できない状況なのだが、それでもゲー
トクラヴィオの魅力には代えられなかった。

乗りたい。動かしたい。

それこそが相田の希望である。

ゆえに本当のところ、トロンがなんであろうとどうでも良い。ゲ
ートクラヴィオの技術面にはさほどの興味がないのだ。

今は動かす方法こそが知りたい。

知りたいからこそ、バツツェの遣りたいように任せている。話の腰でも折ろうもんなら、途中でほっぱり出されそうな気がするからだ。

じっと我慢の時間。しかし、それもそろそろ限界だ。

休憩時間などそれほど長く取る訳ではあるまい。一応先を急ぐ旅らしいのである。

休憩が終わり、移動が再開されれば相田は荷台に戻らねばならない。ニネルがそれを強く望んだのだ。

『キミはボクの側にいろ』

ニネルはそう言った。哀願の色さえその目に湛えてである。

彼女がどういうつもりで言ったのか、その真意を測ることが相田にはできない。

なんにせよ、時間はないのである。

「……じゃあ、ちよつと動かしてみるか」

きた！

おのが指先を勿体付けるようにゆっくり解すバツツェの様子に、相田は瞳を輝かす。

バツツェは奏縦卓前の足元に設えられている複数の爪にブーツを噛ませ、背もたれのない椅子に腰を掛けた。

身体を支えはそれだけのようだ。シートに身体を括り付けるような事はしないらしい。

バツツェの太くごつい指が、鍵盤上に添えられた。

「どっかに掴まっている」

言ってバツツェは鍵盤を強く叩いた。

ゲートクラヴィオ4

『いま見てもあんまり楽しくないと思うよ。歩かしてるだけだからね』

ニネルのハスキーボイスが相田の脳裏に再生される。

確かに……。

鍵盤の上を跳ねるバツツエの指は、まるでのたうつ毛虫のようである。

それに応えて聞こえてくる音色は、ピアノよりもずっと華奢な印象だった。

相田は『あれに似てる、アレアレ』と脳味噌を空転させていた。名前は分からないが聞いたことのある楽器の音色だ。

音楽知識の乏しい相田に代わって答えるならば、たぶんそれはチェンバロである。

確かにその音に近い。加えてトロンが震えているのか、箆ったビブラートが追従している。

無理やり擬音化させるならば『ビヨン』だ。

そして旋律は……極めて退屈だった。

動いているのはバツツエの左手ばかり。つまりは低音。

右手は壁に添えられ、透かし窓を覗き込み死角を減らそうとするバツツエのバランスを助けるのみである。

ナグロの動きも大人しいものだ。

外の風景の移り変わりや、緩やかな慣性でナグロが動いているのは分かるが、立っていられないほどに揺れるわけでもない。

これでは、車の後部座席に乗っていると殆ど変わらない。つまらない。

自分が動かしてこそ楽しくなる、と思いたいが……正直相田は心が冷えていくのを感じた。

『これはダメだ』

相田の肩の線が落ちる。

意味が分からないのである。

ナグロの動きとバツツェが鍵盤を叩くテンポが合っていない。
バツツェがクラヴィニストとして、下手くそということではなく、
これはそういうモノなのだろう。

どうやら『一音Ⅱ 一歩』ではないようだ。

進路を修正する時に音を鳴らしているのかも知れない。

なんにせよ、操縦桿を左に倒したら左へ、右へ倒したら右へ、ボ
タンを押したら攻撃、そういう単純なことではない。

つまり操縦が直感的でないのだ。

早くも心がくじけた。

「どうだあ？ 簡単だし、乗り心地もいいだろう？」

振り返ったバツツェの目の前で、相田は明らかにげんなりとした
表情を浮かべていた。

この世界はどうも自分に優しくなさそうだ——と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1526q/>

悩む鉄巨人（仮）

2011年6月20日23時58分発行